

# 現職教育

## 1 研究の構想

### (1) 研究主題

「すべての子がいきいきと活動し、集団の中で認め合い高め合う体育学習」

～仲間とともに わかる できる 楽しさや喜びを～

### (2) 研究主題設定の理由

本校では H7 年度から研究の視点は変わってきてはいるものの、「子どもから見た運動の特性」を大切にし、学習する子どもにとって、その運動がどのような魅力を持っているのか、どのようなところが不安なのか、どのような楽しみ方ができるのかということ子ども目線になってとらえ、学習のねらい・道筋を導きだしてきた。その成果として、子どもたちは、出会った運動に自発的に取り組み、その運動を楽しむことができている。また、単元の途中で単元計画を見直すなど、柔軟な単元構成を行うことで、その楽しさを単元の終わりまで継続することができている。

しかしながら、それぞれの運動をより楽しむための技術の定着や広がりについては、学年が進むにつれ積み上がっていくはずであるが、充分ではない。これは、教師が単元を計画する際に、子どもたちにどのような力を身につけてほしいかという、明確なビジョンが持っていないことに起因する。結果として、このことは、学習者である子どもが、「何を学んだのか」「どのような方法で学んだのか」「どのような力がついたのか」ということを感じにくい単元学習になっているということである。

そこで本年度は、研究主題を「すべての子がいきいきと活動し、集団の中で認め合い高め合う体育学習 ～仲間とともに わかる できる 楽しさや喜びを～」と設定し、学習者である子どもたちの「わかる」「できる」を大切にしながら学習を進めていきたいと考える。子ども自らが運動のおもしろさを見だし、仲間とともに夢中になって運動に取り組みながら、力いっぱい技を磨いていく、そのような子どもたちを育てていきたい。

### (3) 研究の仮説

授業者が、PDCAサイクルによる学習課程を意識することで、子どもたち自身が学習内容を決定していくといった主体性がうまれる。

また、授業者が、子どものつまずきや伸び悩みを、ICTを活用した「見える化」により気づかせることで、問題解決に向けた主体的な軌道修正や新たな目標設定 (P) が行われ、主体的・協働的に問題を解決しようとする場面や風土がうまれる。それが技能の習得を早めたり、より楽しさを味わえたりすることにつながるのではないかと考える。


## 2 研究の内容

### (1) 学習過程、学習形態の工夫

#### ア 学習過程


運動のおもしろさをしっかりと捉え、そのおもしろさを味わえる学習過程を考えるため、単元の学習を「はじめ（単元学習開始前）」「なか（単元学習途中）」「おわり（単元学習終了後）」の3つに分けて考え、子どもの思いや願いを見つめていく。

「はじめ」の段階では、学習前の子どもの内的心情を探っていく。

- 
- ・ 学習する単元が好きなのか嫌いなのか概ね把握する。【情意面】
  - ・ 学習する単元について知識や学習の進め方などについて概ね把握する。【認知面】
  - ・ 学習する単元に必要な技能のレベルについて概ね把握する。【技能面】


このような観点から授業を構想し、授業者がその単元で「どのようなことを学習するのか」（課題設定）また、「どのように学習するのか」（単元構成）ということを明確にし、今持てる力で望むスタンダード課題を設定し、より高まった力でアドバンス課題に望む。

次に「なか」の段階では、教師が学習活動の中で子どもの思いや願いを見つめていく。

- 
- ・ 運動すること自体に喜びや楽しさを感じる子どもを捉える。
  - ・ 学習を深めていく途上で「問い」をみいだす子どもを捉える。
  - ・ 「あっそうか」「わかった」といった画期的な発見をする子どもを捉える。
  - ・ 学習途上で発見した「問い」をもとに、その解決に向かってどのような方法で試行錯誤しているのかその活動の様子を捉える。
  - ・ 子どもが共感している姿（自分だけでなく、友達とつながりやかかわりを考えながら、楽しさを分かち合う姿）を捉える。

「なか」の段階での子どもの思いや願いをみつめることで、学習課題がよりはっきりとし、身につけるべき力や高めたい力が明確になる。また、子どもたちは学習に意欲的に取り組み、その学習成果も向上することにつながると考える。

最後に、「おわり」の段階では、単元終了時にその学習を振り返る。

- 
- ・ 何を学んだのか。
  - ・ どのような方法で学んだのか。
  - ・ 学習後にどのような力がついたのか。

次の単元学習の参考にするとともに、次年度にむけた課題を整理しておく。

また、実際の授業では、問題解決の学習過程を基本とし、授業前半に、その運動に関わる感覚を養う運動を取り入れていく。感覚作りのための運動はそれぞれの学年の発達段階を考慮したものを取り入れ、「いま・ここ」にいる子どもたちにとって、運動をより楽しむために必要となる動きである。子どもたちの運動のスイッチがはいる運動を授業者が選択する、もしくは子どもたちと作っていくことが望まれる。次に、授業のめあてをつかむ活動である。「なか」で見取った課題や、子どもたちの思いや願いから、めあてを設定し、解決にむけたイメージを膨らましていく。そして、それぞれの場で、子どもたちは、運動のおもしろさにふれながら課題解決にむけた活動を行っていく。自分と運動との関わりをしっかりと持ち、さらに友だちと交流しながら高め合っていく。授業の最後に、学習の過程で気付いた事や学んだことを話し、学習カードに書くことを通して、運動をより自分のものとしてできるよう工夫していく。

## イ 学習形態

子ども一人ひとりの思いや願いを大切に考え、授業を展開していく上で、様々な学習形態が考えられる。一斉学習、ペアやトリオ、少人数のグループ（異質・同質）などである。

子どもたち一人ひとりの運動経験には違いがあり、運動の好みにも違いがある。一斉学習を行い、単一の目標を課題として設定する学習形態では、学習内容と子どもの思いや願いとの乖離が考えられる。しかしながら、子どもたち一人ひとりを大切にするがあまり、その違いだけに目がいきすぎた場合、「集団」としての学びが行われない可能性がある。子どもたちを一人ひとりが単に並び合う「集合」と捉え、互いにかかわり合い、影響を及ぼし合う「集団」としての理解をおろそかにすることはさげなければならない。「集団を通して個を生かす」という言葉をふまえ、学習形態はより柔軟にしていく必要がある。授業者が子どもたちに学ばせたいねらいを明確にしながら、授業の中で、子どもたちがより運動に関われる効果的な授業形態を選択していきたい。

### (2) 協働的な学び（学習）を効果的に取り入れた指導

子どもたちが協働的な学びを行っていく上で大切なことは、学習目標や課題、成果の共有であると考えられる。そして、そのためには、PDCAサイクルによる授業展開が大切であるとする。

- (P) Plan 「自分（チーム）の課題をつかみ、解決のための仮説をたてる」
- (D) Do 「仮説の実践を行う」
- (C) Check 「実践結果を振り返る」
- (A) Action 「課題解決方法の改善をはかる」

このPDCAサイクルを繰り返す事で、子どもたちの学習目標や課題、成果の共有がはかられ、より効果的な協働性のある学びが行われる。実際の授業では、(P) めあてをもつ→(Do) 活動する→(C) 振り返る→(A) 次時への課題に生かすということを繰り返し行っていく。ただし、子どもたちは往々にして自分たちの課題設定をあやまることがある。その場合は、教師が適切な課題設定へと導いていく。また、活動中は適切な資料掲示や言葉かけを行い、子どもたちの意欲的な取り組みを支えて行く。振り返りでは、「今日の活動がうまくいったのはなぜか？上手いかなかったのはなぜか？」等、話し合いの内容が明確なものとなるよう、ワークシートを工夫する。そして、次時への課題につなげていく。また、子どもたちに対するタイムリーな支援として、タブレット端末などのICT 機器や資料、ワークシートなどを活用する「見える化」を行っていく。

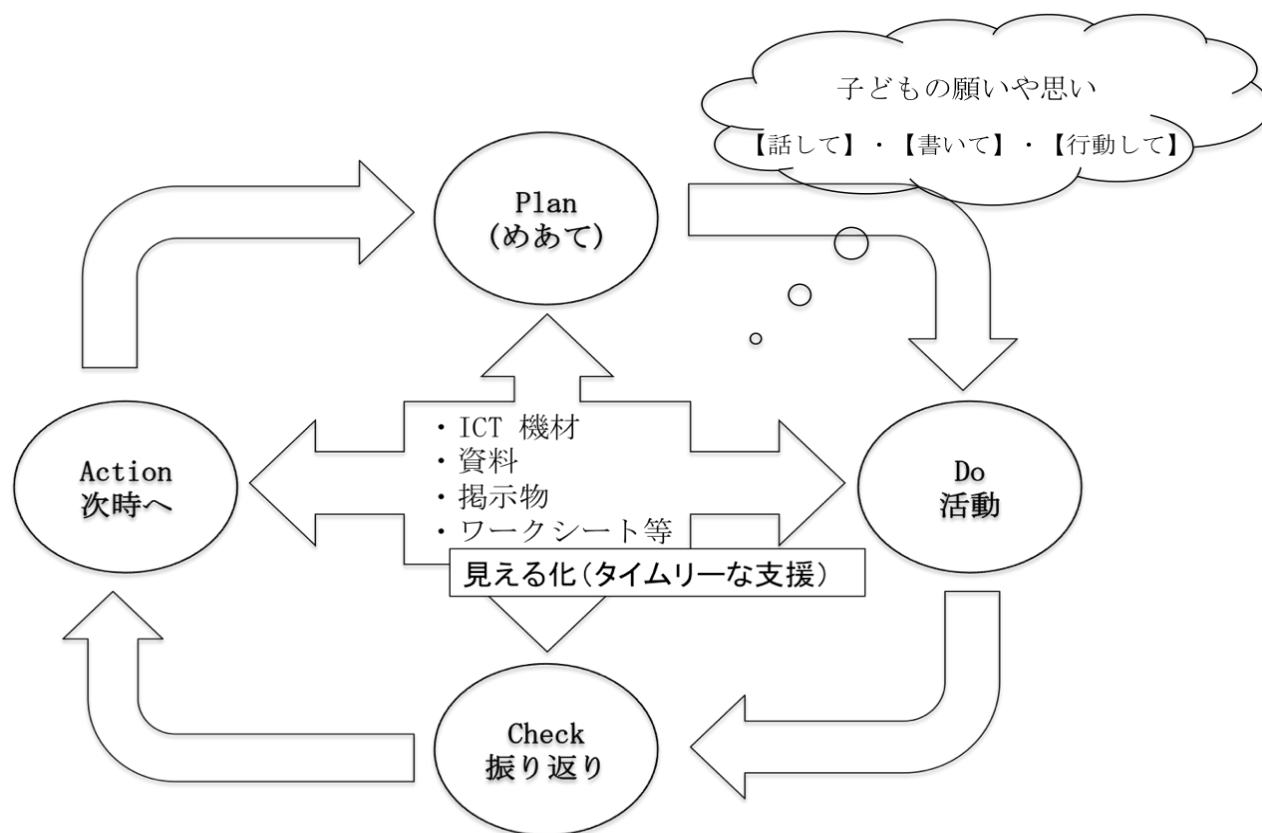
加えて、PDCAサイクルでは、学習者の思いや願いを表現させることが肝要であるため、それぞれの表現の場、方法を考え、

【話して】 授業中に自分の考えや気持ちを友だちの前で発言。

【書いて】 体育作文・ワークシート等を書いて表す。

【行動して】 練習方法の工夫や友だちとのかかわりの中で。

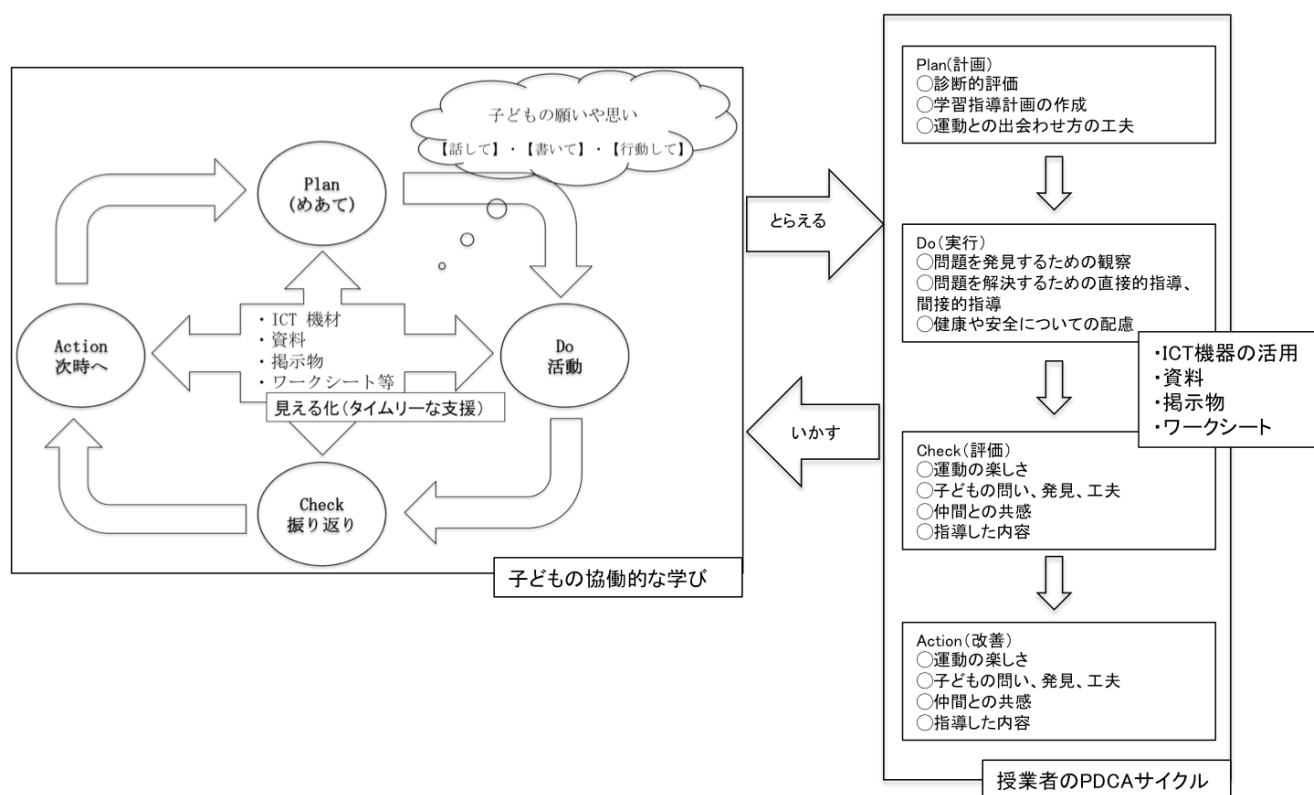
の3つの観点から子どもの思いや願いの表現の場を保障していく。



### (3) 指導と評価の在り方

「指導したことを評価する」「学習を評価したことを次の指導に生かす」といった、「指

導と評価の一体化」の重要性は体育だけでなく、すべての教科で強調されている。ここでいう「指導と評価の一体化」とは、指導した結果、その成果を見取るものとして評価を位置づけるものであり、その評価をフィードバックしつつ形成的な授業をめざすものである。ここで大事なのは、授業者である教師が、運動のおもしろさをどのようにとらえ、どのような力を身につけてほしいかということである。授業者が運動のおもしろさを子どもたちに存分に味わってもらうには、どのような流れが必要なのか。また、身につけてほしい動きをどのような形で指導していくのか。子どもたちの目線に立ちながら、今持てる力でのスタートから、計画→実行→評価→改善…（PDCAサイクル）を行っていく。その際、ICT機器を効果的に取り入れたり、評価に効果的なワークシートを工夫してみたり、様々な工夫をしていく。ただし、指導者が勝ち負けを基準とした評価や指導を行った場合、学習のプロセスや文脈は子どもたちにとって価値のないものとなりかねない。生涯に渡って運動に関わる資質や能力を育成するためには、学習のプロセスや文脈がより大切である。子どもたちの学習の必然性を高め、結果だけにとらわれない、指導と評価を行っていききたい



### 3. めざす子ども像

めざす子ども像

- 低学年・・・夢中になって運動を楽しむ子
- 中学年・・・仲間とかかわりながら運動を楽しむ子
- 高学年・・・自分なりのめあてを持ち、工夫して運動を楽しむ子

#### 4. 近年における本校の研究の歩み

- 平成 6 年度 研究の主体を体育科にしぼり、子どもが自発的に取り組む体育学習を進め、基本的な考え方について共通理解をはかり研究を深める。  
——第 4 回近畿小学校体育研究会和歌山大会研究発表——
- 平成 7 年度 子どもの自発性を大切にした支援の在り方について研究を深める。  
——第 22 回和歌山県学校体育研究大会和歌山大会研究発表——
- 平成 8 年度 子ども一人一人の追求の過程と単元を見通した指導の在り方について研究を深める。
- 平成 9 年度 自ら意欲的に運動を楽しめるようになるための支援の在り方について研究を深める。
- 平成 10 年度 支援の観点を意欲・創意工夫・技能に整理し、それを学習過程に具現化する方法について研究を深める。  
——第 43 回全国体育学習研究協議会和歌山大会研究発表会——
- 平成 11 年度 運動の楽しみ方と子どもとの関係の在り方について研究を深める。
- 平成 12 年度 子どもの思いや願いを大切に、運動の楽しさを味わうための学習過程の在り方について研究を深める。
- 平成 13 年度 子どもの思いや願いをみつめ、いかす単元学習のあり方  
～「この子」の思いや願いをみつめるとは(第一年次)～
- 平成 14 年度 子どもの思いや願いをみつめ、いかす単元学習のあり方  
～「この子」の思いや願いをいかすとは(第二年次)～
- 平成 15 年度 子どもの思いや願いをみつめ、いかす単元学習のあり方  
～「この子」の思いや願いを表現させて(第一年次)～
- 平成 16 年度 子どもの思いや願いをみつめ、いかす単元学習のあり方  
～「この子」の思いや願いを表現させて(第二年次)～
- 平成 17 年度 子どもの思いや願いを意欲につなげる支援のあり方(第一年次)
- 平成 18 年度 子どもの思いや願いを意欲につなげる支援のあり方(第二年次)
- 平成 19 年度 子どもからみた運動の特性をいかした単元学習のあり方(第一年次)  
——第 52 回全国体育学習研究協議会和歌山大会研究発表会——
- 平成 20 年度 子どもからみた運動の特性をいかした単元学習のあり方(第二年次)
- 平成 21 年度 子どもからみた運動の特性をいかした単元学習のあり方(第三年次)
- 平成 22 年度 子どもからみた運動の特性をいかした単元学習のあり方(第四年次)
- 平成 23 年度 子どもからみた運動の特性をいかした単元学習のあり方(第五年次)
- 平成 24 年度 子どもからみた運動の特性をいかした単元学習のあり方(第六年次)
- 平成 25 年度 子どもからみた運動の特性をいかした単元学習のあり方(第七年次)
- 平成 26 年度 子どもからみた運動の特性をいかした単元学習のあり方(第八年次)
- 平成 27 年度 子どもからみた運動の特性をいかした単元学習のあり方(第九年次)
- 平成 28 年度 子どもからみた運動の特性をいかした単元学習のあり方(第十年次)